

## —日本語を教える意味を戦前・戦中の在欧日本人講師の声にたどる—

小川 誉子美  
横浜国立大学

### 要旨

1945年以前のヨーロッパで日本語の教壇に立った日本人講師に焦点をあて、当時の社会背景や制度と彼らの活動をたどりながら、日本語講師職に就いた動機や職務に対する意識について、小川（2010）をもとに紹介する。

【キーワード】 寄付、日独関係、広報活動、日本語教育史

**Keywords:** Donation, Japan-Germany Relations, Public Relations, History of Japanese Teaching

### 1 目的と背景

ヨーロッパにおける草創期の日本語講座は、1855年のオランダのライデン大学に始まり、日本の開国後間もない1863年には、パリやフィレンツェの高等教育機関に開設された。明治維新後の1870年代には、リヨンやヴェネチア、ライプチヒでも開講された。この中には、日本人講師のみが教壇に立ったという機関もある。講座開設の変遷をたどると、ヨーロッパにおける日本語人材の育成は、当時の社会需要と密接に関わり、各地の各時代の対日関係を反映していることがわかる。一方、日本人講師に焦点を当ててみると、1873年のヴェネチア王立商業高等学校で教えた吉田要作をはじめ、断続的にヨーロッパ各地の教壇に立ち、1930年代後半以降ピークを迎えるのである。特に、日本の民間資金の投入により、日本研究機関が設立され、日本人講師の数が増えるのが、1930年代から40年代にかけてのドイツやその近隣地域である。1930年代後半には、小規模ながらもいわゆる日本語ブームがあったことが報告されている。こうした活発な動きは、この時期に突如としてあらわれたわけではなく、1920年代から、民間による活動が展開されていた。本稿では、日本人講師の活動が活発になる1930年代から1945年4月までを中心に、その前史となる1920年代の交流基盤が確立されていく過程にも注視しながら、小川（2010）や他のものをもとに、日本人講師の人物像や彼らの日本語講座の教壇に立った動機や職務意識などを紹介する。

### 2 制度の変遷

#### 2.1 1920年代の日独間の諸制度

明治以降、日本の近代化の過程で、欧米の諸科学や制度がもたらした影響は計り知れない。当時の日本とドイツは、日露戦争後の三国干渉をはじめ、第一次世界大戦で交戦するなど、政治面では順風万帆であったわけではない。しかし、学術面では、お雇い外国人として来日したドイツ人による医学や科学技術、法律ほか諸分野での貢献があり、一方、明治期の留学先としてドイツで学び、帰国後日本の近代化に貢献した元留学生も多くいる。その後、第一次世界大戦勃発によりドイツ留学は途絶えたものの、まもなく制度を取戻し、大戦後冷え込んだ日独関係の修復を目的に両国の文化研究の機関が設立されるようになった。その一つが1926年に設立されたベルリン日本研究所である。カイザー・ヴィルヘルム

協会（現マックス・プランク研究所）の直轄下にある当研究所は、日本の近代化の理解には日本の宗教及び歴史研究が必要と考えられ、その促進につとめた機関であった。所長には、ノーベル化学賞受賞者であるフリッツ・ハーバーが就任し、ドイツ人主事と日本人副主事が一人ずつおかれた。当初、主事として、ドイツ側は、フレデリック・トラウトやマーチン・ラミングらが、日本からは、宇野哲人（漢学・東京帝国大学教授）や鹿子木員信（哲学・慶應義塾大学、九州帝国大学教授）らが派遣された。主事らは、日独文化協定締結後に設置された日独文化連絡協議会に両国の代表として参加し、日本語講座の拡充をはじめ文化政策について議論の先頭に立ったのである。

ライプチヒ大学と京都帝国大学の間では日独間で初めての大学間協定が締結され、1928年に、それまで、日独間では行われていなかったアレクサンダー・フォン・フンボルト財団から、日本人留学生らへの受給が開始された。その後、第二次世界大戦の勃発により、留学生らの渡独の足は遠のいたが、大戦下のドイツへ渡る留学生に対しフンボルト財団のみが奨学金支給を継続し、彼らが後に日本語講師として教壇に立った。このように、1920年代には日独間の学術交流の諸制度が確立していたのである。

## 2.2 日本の民間人の活動

日本の民間人の活動、特に、個人や企業によるドイツへの寄付が相次いで行われるようになったのも1920年代であった。この時期に行われた背景には、第一次大戦後のドイツの学術復興をすすめるという目的があったのである。その一つ、星一（星製薬創業者）は、「ドイツ学術の浮沈は世界文化の運命と密接な関係」があると考え、寄付を行った。後藤新平（ミュンヘン大学で医学博士号取得）が立ち会い、駐日大使オットー・ゾルフ（仏教学者）を経由し、ドイツ相互扶助会に託された。ヨーゼフ・クライナーによると、星の寄付により遂行されたプロジェクトは100件程度あったという。こうしたドイツの科学技術や医学の分野での学術振興のための寄付のほか、日本研究に関する学術振興を目的とした寄付があった。この目的で行われた寄付が、のちの、日本語・日本研究機関の設立を促した。

その例として、本山彦一や佐多愛彦らが設立したライプチヒ大学日本研究所について紹介する<sup>1</sup>。本山彦一は、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社社長をつとめ、日独間の学術交流に対する寄付を行ってきた。日独間のはじめての大学間協定が、ライプチヒ大学と京都帝国大学との間で締結されたが、学生・教授交換の話が持ち上がった際、当時日本の文部省には、留学費用をまかなう制度がなかったため、京都帝国大学総長が、友人であった本山彦一に相談を持ちかけ、それまでもドイツの科学技術振興のために数々の寄付を行ってきた本山がこの窮状を打開するため、奨学金を援助したという経緯があった。日独間の最初の大学間協定を軌道に乗せるため留学資金を援助したのが、本山なのである。

一方、研究所開設のもう一人の立案者であり出資者でもある佐多愛彦（1871～1950）は、大阪日独協会の会長を務めた人物である。佐多は、ロベルト・コッホのもとで医学を学び、大阪医学校校長を務め、内科医としても業績を残したが、大阪に日独協会を開設するなど日独交流にも深く関わった。佐多は、英語が中心であった旧制高校の外国語科目にドイツ語を導入するよう尽力する一方<sup>2</sup>、現代日本に関心のあるドイツ人に対する啓蒙を目的とした活動を行った。ドイツにはさまざまな国を研究する機関があるのに、日本に関する研究機関がないことを嘆き、次のような期待を表明していた。

「一体に、日本人はドイツ人を知るが、ドイツ人は日本人を諒解し難いようである。そこで私は、今度ドイツのどこで講演するに当たっても、ドイツの大学には支那学や日本を研究する科は只ハンプルグ大学のほかない、これは実に遺憾なことで、大に日本研究科を設置して欲しいと力説し、また当路の人々にも主張した。スツトガルト（ママ）市でラヂオの講演放送をした時も南ドイツ民全体にこの要望を訴えたが、恐らくドイツ各大学では近く日本研究科を置くと信じている。」<sup>3</sup>

こうした佐多の日独交流の不均衡是正という信念は、両国間の交換留学制度を確立し、日本研究および交換留学を援助する機関の創設が必須であると主張するユーパーシャールと、日独交流のためにさらに巨額の寄付を考えていた大阪毎日新聞社・東京日日新聞社社長の本山彦一らとともに本山基金を設立することで実現した。この本山基金をもとに、ライプチヒ大学にライプチヒ日本研究所 (Japan-Institut an der Universität Leipzig) が設立され、教授としてユーパーシャールが迎えられ、ドイツ終戦間際まで継続的に日本語講師が教壇に立つのである。

## 2.3 1930年代の日本の公的機関の活動

第一次大戦後、国際社会の中で影響力を持つものとして国際世論が国際政治の重要な要素と見なされるようになり、各国が競いあうように広報文化活動を展開していった。1930年代になると、イギリスがブリティッシュ・カウンシルを、ドイツがゲーテ・インスティテュートを開設し、同時期に、日本も国際文化振興会（略称 KBS、国際交流基金の前身）を設立し活動を開始した。日本の広報活動を支える公的機関として、1934年4月11日に発足した国際文化振興会は、広報文化活動として国際文化事業を推進し、日本語・日本学講座支援もその一つとして扱われた<sup>4</sup>。

KBS の推進する国際文化事業は、当初、アメリカやイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ポーランド、ベルギー等で展開された。国際文化事業とは、事業綱要によると、一つ目に著述、翻訳及び出版、二つ目に海外での日本研究講座の設置、講師の派遣及び交換とあり、講演会や外国人の招聘、学生派遣や交換が続く。ドイツには、日本棋院の福田五段、宝塚歌劇団、山田耕筰らが渡独し、また、日本文化の海外紹介のための各国語による単行本作成として、ブルーノ・タウトの『日本の建築』やヴィルヘルム・シュミットの『日本の民族学的地位探求への新しき道』が選ばれ、ライプチヒの特約店から販売された。1937年の日独合作映画「新しき土」の製作・上映もあった。ヨーロッパに対する国際文化事業は、イギリスやフランス、ベルギーに対しても行われていたが、ドイツに対するものが規模において最も大きかったのである。

KBS の重要な事業の一つに、欧米主要都市への海外連絡員の派遣がある。例をあげると、ドイツに派遣されたのは、友枝高彦（東京文理科大学教授・倫理学）、荒木光太郎（東京帝国大学教授・経済学）、伊藤忠太（東京帝国大学教授・建築学）ら、欧米留学の経験を有する各分野の第一線に立つ研究者であった。彼らは、数ヶ月の滞在で各都市を回り講演を行い、帰国後、日独交流団体に要職を務め、日独関係に影響を及ぼす立場にあった。こうした交換教授の派遣は、1939年ドイツの戦争突入とともに中止された。その結果、大戦下のドイツでは、交換教授に代わり、当地で教壇に立つ日本語講師や大使館関係者らドイツ在住の者が、各地で講演活動にあたっていくのである。

## 3 日本人教師の実像

### 3.1 人物像—学術活動

KBS の一連の事業は途絶えたが、大戦下のヨーロッパでは、ドイツのほか、イタリア、ハンガリー、フィンランド、ブルガリア、チェコにおいても、日本語講座や日本学講座が新規に開設され、日本人講師が着任していった。1930年代から40年代にかけて日本人講師が日本語講座の教壇にたち、在欧日本大使館から謝金を受けていた講師の所属機関は、確認できる範囲では、ドイツではライプチヒ大学、ベルリン大学をはじめ9機関、ハンガリー4機関、イタリア3機関を含む22機関に及ぶ。

講師らの多くは、浄土宗・曹洞宗派遣学生、交換学生、フンボルト給費生、文部省在外研究員という身分を有し、研究を目的にドイツ、オーストリア、イタリア、ハンガリーに渡った留学生であった。日本語教師として自ら志願し渡欧したのは確認できる範囲では、村田豊文（ベルリン大学、ウィーン大学）、岩倉具実（ハイデルベルク大学）、摩寿意善郎（ナポリ王立東洋学校）の3名である。村田は、日本国内で日本語教育の経験があり、ベルリン大学のシャルシュミットが、グンドルトが会長を務める東京の日独協会に依頼し、推薦されたのであった。その多くは、人文・社会学系の分野を専門とした。言語学や言語研究を専門とする者に、岩倉具実（言語学・ハイデルベルク大学）、前田護郎（言語学・ボン大学）、野上素一（言語学・ローマ大学）、徳永康元（言語学・ブタペスト大学）、守屋長（スラブ語学・ワルシャワ大学、フランクフルト大学、ハンブルク大学）らがいた。彼らは、ヨーロッパの複数の言語に通じており、当地の学問や文化事情に詳しい者であった。

また、ワイマール時代に留学生として渡独し、後に日本語を教えるようになった者に、松本徳明、杉本勇蔵、植田敏郎、岡正雄、若山淳四郎、北山淳友らがいるが、彼らは、いずれも当地で博士論文を執筆している。松本徳明（ボン大学）はスリランカ留学の経験を、杉本勇蔵（ハンブルク大学）はイギリス留学の経験を有し、ドイツで博士論文を執筆し学位を得た。また、植田敏郎や岡正雄は、ウィーン大学に論文を提出し学位を得ている。中でも、北山淳友（フランクフルト大学ほか）の研究活動は注目に値する。北山は、1924年からフライブルク大学、ハイデルベルク大学で学び、マールブルク大学の宗教資料収集研究所の助手を兼務しながら、博士論文をカール・ヤスパースに提出し学位を得た。その後、フランクフルト大学時代に文化形態学者のフロベニウスから、当時構想中であった文化形態学研究所の日本部門の所長としての就任を打診されていた。この計画は、日本大使館から日本研究所の日本人主事に任命されたことで実現にいたらなかったが、マールブルク大学では、客員教授（Honorarprofessor）として仏教学や文学、日本語を教えた。現地でこの職を得た日本人は、確認できる範囲では、松本徳明と北山淳友のみである。

### 3.2 家族背景

日本人講師の中には、親族に幕末から欧米諸国と関わりをもつ者もいた。村田豊文（ベルリン大学）の曾祖父堀達之助はアメリカのペリーが浦賀来航時に通詞をつとめ、バタビア新聞の翻訳等に携わり、吉村昭の小説『黒船』のモデルにもなった。祖父堀孝之は薩摩藩士らの英国行きやパリ万博に通詞として同行している。また、岩倉具実（ハイデルベルク大学）は、1871年には特命全権大使として岩倉使節団を組織し、国政にも深く関わった明治の元勳、岩倉具視を曾祖父にもつ。桑木務（ヘルシンキ大学）の父桑木彥雄、伯父桑木巖翼は、それぞれアインシュタインの招聘、カント哲学の紹介等、ドイツの学問の日本への移入に尽力し、日本の科学史界、哲学界で指導的立場にあった。外山高一（ブタペスト大学・ウィーン大学）の父外山正一は、幕府派遣留学生としてイギリスに学び、東京帝国

大学総長、文部大臣をつとめた。野上素一（ローマ大学）の父は、英文学者・能楽研究家の豊一郎であり、母は作家の弥生子である。このように、日本語講師の中には、家族に、留学経験等を有し、政治や学問の分野で活躍した者が目立つ。そうした環境にあった彼らにとって、海外留学は将来の進路の一つとして身近にあったものと思われる。

### 3.3 声

こうした背景を持つ日本語講師らが日本語教師として教壇に立った動機、職務に対する意識や使命観とはどのようなものだったのだろうか。

「“世界に広めん日本語”というのが、ローマ字仲間の標語の一つであったので、ヨーロッパで日本語を教えることを一生の仕事にしようと決心した。」【岩倉具実・ハイデルベルク大学】  
「たとひ貧乏生活をして何か国家的仕事をして御奉公致し度いと思う事です。私は結局無名の民間外交家としてこの尊い一生を捧げ度いと思ひます。」「前学期の終わりには日本学科の学生がここ一流レストランに招待して呉れました。村田先生に感謝する会なるものをしてくださいました。こんな事は日本ならざらにあることですが個人主義の欧州ではあまり無い事だと他の教授に大いに羨望された事でした。この年になりやっと自分の全精神を打ち込んでやれる職場を見出したものと云へるでせう。将来小生はどんなコースに進むにせよ、こうした意味の仕事をする事が自分の性格にも趣味にも合ひ又もっとも興味のある事に思へます。」

【村田豊文・ベルリン大学】

「6月には独ソ戦が始まり、決定的に帰国の路は閉ざされた。東亜の戦局は大変なこととなり、帰国は絶望的となった。私はいいやいやながらやむを得ずベルリンに滞在することとなった。その夏頃からライプツィヒ大学に就職するという話が持ち上がっていた。」

【守屋謙二・ライプチヒ大学】

「日本に対する悪宣伝の否定と説明をしております。シナの一部の学生はこの悪口を言っておりますが、全く馬鹿げた風説ですが、大使館の人は、民衆がどうまちがって日本を信じているか、一人もご存じないのです。私は、彼の認識不足を是正致し機関文献パンフレットを示しております」

【野上素一・ローマ大学】

「その頃独逸から世界的学者をブタペストに一週間ごとに砲弾のごとく送り込まれ、私は此の状況を見て決して茶の湯の紹介なんといふものではない一つの文化工作の本質といふものを如実に見せられたような感じがした。」

【ウィーン大学・岡正雄】

以上は、書簡や回想録から断片的に抜粋した声である。これらから、日本語の教授や異文化交流を天職と認識し邁進する姿、第二次世界大戦が勃発後、帰国の手段を失い、糊口をしのぐため帰国までの一時的なつなぎとして教壇に立つ姿、広報活動の重要性を痛感しその担い手として職責を果たそうとする姿などが浮かび上がってくるのである。

当時の講師の中には、1970年以降に迎える定年時に、その経験を詳細に残す者もいたが、多くの場合、当時の日本語教授の経験はほとんど語られることはなかった。特に、村田豊文（ベルリン大学・ウィーン大学）は、滞欧時代について、留学経験としては語っても10年近く携わった日本語講師としての経験を記すことも語ることもなかったという<sup>5</sup>。

## 4 結語

戦争終結とともに講座は閉鎖され、講師の多くは帰国の途についた。当時の講師の中に

は、戦後ヨーロッパに再び渡り日本語を教えた者や、日本で留学生教育に携わった者もいる。現在、語学教育や文化交流を支える理論や実践研究は、飛躍的に発展し、我々はその恩恵に浴している。この発展を享受でき、インターネットを通じて歴史資料に容易にあたれる今日、先人の声とともに足跡を辿り再検証するなど、日本語教育の歴史を記述し後世に残すことはさほど難しくない。当時の歴史資料が散逸しないうちにこうした作業に取り組むことは、学問としての日本語教育学にとって、喫緊の課題ではないだろうか。

## 参考文献

- 小川誉子美 (2005) 「対独文化事業としての日本語講座に関する記述—1930 年～1945 年にドイツで教えた日本人講師についての考察—」『日本語教育』127 号 日本語教育学会 pp.61-70.
- 小川誉子美 (2005) 「大戦下ドイツでのギムナジウムにおける日本語講座開設に関する記述—文化事業としての日本語講座開設の経緯と意義について—」『言語政策』第1号 言語政策学会 pp.129-142.
- 小川誉子美 (2005) 「黎明期の日本語・日本学講座を担当したドイツ人講師と講座支援の背景に関する考察—対外広報活動としての日本語講座という観点から—」『日独文化交流史研究』第8号 日本独学史学会 pp.79-94.
- 小川誉子美 (2006) 「戦間及び大戦下の欧州における日本語教授者の実像—村田豊文の場合—」『日独文化交流史研究』第9号 日本独学史学会 pp.107-121.
- 小川誉子美 (2010) 『大戦下の欧州における日本語講座—実態と背景』風間書房.
- 小川誉子美 (2011) 「日本語講師北山淳友の事績—戦間期の対独時代を中心に—」『日本学刊』香港日本語教育研究会 pp.4-15.
- 国際文化振興会 (1964) 『KBS30 年の歩み』国際文化振興会.
- クライナー ヨーゼフ、安藤勉訳 (2003) 『東京・江戸の中のドイツ』講談社学術文庫
- 「ようこそ！日本語教育・学習史のホームページへ」<https://ynu-isc-kokusai.jimdo.com/>

<sup>1</sup> ライプチヒ大学の日本語講座は、ドイツでもっとも古く、中国学者・言語類型論学者としても活躍したガーベレンツ (Georg von der Gabelenz, 1840-1893) が 1878/79 年の冬学期、哲学科に東アジア諸言語セミナーを開設し、中国語のほかマレー語や満州語、日本語を教えたことに遡る。

<sup>2</sup> 佐多が日本の上級ギムナジウム (旧制高等学校のことか) にドイツ語導入に成功したことは、ドイツの書籍に新しい道を開くことになり、特に本の都ライプチヒにとって有益な人物とみなされていた (ライプチヒ大学古文書館所蔵資料 KAL.Phil.Fak.D1/1707)。

<sup>3</sup> 1928 年 1 月 1 日付大阪毎日新聞「ドイツ概観 (上)」。

<sup>4</sup> 『KBS30 年の歩み』には、KBS の設立を促進した背景に、「外国の対日認識の不備を是正しようとする動き」と「アジア情勢の新局面に対処するうえからも、より深く正確な対日認識を必要とされて日本研究の動きが強まった」という二つの潮流があったと記されている (国際文化振興会 1964 : 11-12)。

<sup>5</sup> 東京女子大学の教え子の方々の証言による。